

TIMS XXIV 国際会議に参加して

高橋 幸雄

6月18日から22日まで、ハワイのホノルルで第24回のTIMS 国際会議が開催された。会場はワイキキ海岸の西の端にある Hilton Hawaiian Village で、きれいな海岸が目の前にあり、会議の合間にちょっと遊びにゆくには絶好の場所であった。

会議の参加者は、事前登録した人が650人、最終的な参加者は750人であった。しかしDC10の影響もあってか、例によってかなりの参加とり消し、講演とり消しがあったのは残念であった。

今度の会議ではおもしろい試みがいくつかなされた。その1つは、全員が大きな Dome の中で朝食をとりながら話を聞く Plenary sessions が催されたことである。プログラムは、

20(水) W. W. Cooper & A. Charnes: Management Science Relations for Evaluation and Management Accountability

21(木) Martin K. Starr: Panel…… Management Sciences Charter for Tomorrow

22(金) John D. C. Little: Marketing Science

で、21(木)のパネルには日本から松田武彦先生が参加された。どの講演も大変大事なことを指摘していたようであるが、いかんせん、Domeの音響効果が悪くほとんど聞きとれなかった。もう少し音響設備に気が配られていたら残念であった。20(水)の Cooper & Charnes の論文と21(木)の各パネラーの論文は松田先生が貰っておられるので、そのうち日本のOR学会で紹介してくださいと思う。

22(金)の Little の講演は、1つの商品が企画されてから市場を去るまでを marketing life cycle としてとらえ、企画、test market、宣伝、安売りなどの各段階における model と measurement について述べたものである。その中で computer が marketing に新しい道を拓いたと盛んに強調していた。これは米国ではかなりの商品に bar code が普及したことと関係がある。

computer を bar code のついた商品の management に使うと、日毎の市場占有率のデータまでがとれるようになり、広告宣伝や販売の効果がもの見事に測定できるからである。往復の飛行機の中で飲んだワインの瓶にまで bar code がついているのに驚いたが、日本でもいずれは普及して、このような新しい marketing 理論が使われるようになるであろう。

もう一つの試みは、初日18(月)を tutorial sessions にあてていたことで、

J. Dyer, et al.: Managing with Multiple Decision Makers

J. H. Moore, et al.: Laboratory Experimentation in Management Science and MIS

P. Keen, et al.: Decision Support Systems

L. A. Zadeh, et al.: A Tutorial in Fuzzy Set Theory

G. Thompson: The Use of Self-Paced Materials for Teaching Management Science

が行なわれた。どの会場もなかなか盛況で、たとえば Dyer の multiple decision makers のセッションでは、Arrow's impossibility theorem の説明、実際に解決するための方法とその欠点の紹介のあと、鮭の漁について、州、漁業会社、インディアンなどの意見調整に適用していた。Tutorial sessions は日本のOR学会でいえば、ちょうどシンポジウムとか特別講演に相当するものであろうが、気軽に聞けるように、やさしく、いくつも並行して行なうところなどはいかにもTIMSらしいと思った。

一般のセッションの一部として、Current OR/MS Interests in Japan が行なわれた。ここでは25の発表予定論文のうち21の論文が発表され、なかなかの出来であったが、割り当てられた部屋がメインの会場から離れていたこともあって、日本人以外の参加者が1、2名で少なかったのは残念であった。とくに日本の企業から参

加された方の発表にはすぐれたものが多く、ぜひ外国の人に聞いてもらいたかった。そのためには、このように日本という形のセッションを作るよりも、各テーマ別のセッションに入れてもらう方が良いという意見の方も多かったようである。

メインの会場は Ball room をカーテンで仕切って14の小部屋を作ったもので、隣りのセッションの音が筒抜けなのは少々耳障りであった。それでも各セッションとも共通の問題に興味をもった数人の人が集まって、活発な討論をしていたようであった。あまりにセッションの数が多く(234セッション)、どの分野でどのような潮流にあるのかといったようなことは皆目わからなかったけれども、私(高橋)が聞いた Applied Stochastic Models では、信頼性と待ち行列(ネットワーク型待ち行列と数値計算)が多かったように思えた。

今回参加して感じたことは、アメリカ人の発表のうまさである、お国柄によることもあるのであろうが、いかに自分の主張を相手に伝えるかに心を配っており、OHPのシートの準備の仕方にもかなりの工夫をしている人が多かった。

もう1つ、今回の参加で重要なことに気がついた。それは日本のOR学会の論文誌 *JORSJ* の circulation の悪さである。ほとんどのアメリカ人の研究者が眼を通しておらず、その存在すら知らない人が多いのには驚いた。これは日本のOR学会の威信にもかかわることなので、ぜひ学会としても努力してほしい。

今回のハワイ旅行は楽しかった。ハワイ島やマウイ島を訪れたり、ポリネシアン・ショーを観にいった人も多かったようだ。私もはじめて珊瑚礁の海で泳いでその美しさに打たれた。再来年の IFORS をはじめ、今後もこのような国際会議がいくつも開催されると思うが、私もできるだけ参加したい。まだ参加された経験のない皆さんも、一度参加されるとその楽しさがお分かりいただけると思う。つぎの機会にはぜひご一緒しませんか。

この原稿はハワイ TIMS 会議 Tour に参加された、西野、森口、松田、州之内、手塚、長谷川らの諸先生をはじめとする25名の参加者のご感想をもとに、高橋がまとめたものである。なおこの Tour では京大の長谷川先生に大変お世話になった。この場をお借りしてお礼を申しあげたい。

(たかはし・ゆきお 東北大学経済学部)